〈特集〉500号
復刻版
名文集

司馬遼太郎	1962年5・6月号	赤尾　兜子	1978年 7月号
稲垣　足穂	1963年 5月号	田辺　聖子	1979年 3月号
淀川　長治	1963年11月号	新井　　満	1980年 5月号
阪本　　勝	1964年 7月号	竹中　　郁	1980年 8月号
白川　　渥	1964年11月号	鴨居　　玲	1983年 1月号
安水　稔和	1983年 1月号	陳　舜　臣	1991年 3月号
岡部伊都子	1965年 1月号	村松　友視	1998年 1月号
遠藤　周作	1965年 6月号	玉岡かおる	1998年 9月号
佐藤　愛子	1966年 7月号	大森　一樹	1998年 5月号
筒井　康隆	1972年 1月号		

■連載／問わず語り ③■

兵庫と神戸

司馬遼太郎
え・中西勝

兵庫という地名は、すでに律令時代からあらわれているほどにふるいが、この地名が諸国のひとの口にしきりととなえられはじめたのは、大坂夏ノ陣がおわった江戸初期のころだろう。当時、中流以下の家庭の若い女性のあいだで、

兵庫髷（まげ）

というのが流行した。とくに、遊女のあいだではやり、この髪形でない者はなかったという。

それ以前の女性の髪型からみれば複雑なもので、やがて島田髷へとつづく日本の女性の結髪史は、この兵庫髷から大きくかわったといえるかもしれない。

兵庫髷のことばのおこりについては、当時から説説があったらしいが、「歴世女装考」というふるい本によると、

「この髷は、摂津国兵庫の遊女より結びはじめたる髷なり」

とある。いまの神戸が、流行の源流であったわけである。

元禄のころになって、島田髷や勝山髷の流行におされて一時すたれたが、その後、兵庫髷をアレンジした髪形が考えだされてふたたび隆盛した。この第二期流行期はもっぱら遊里で、形によって名も立（たつ）兵庫、結（むすび）兵庫、ウツオ兵庫などとよばれた。読者はおそらく、時代映画や小説のサシエなどで御記憶があるはずだが、いずれも、第一期の兵庫髷ほどの高雅さはないが、豪華という点では原型よりもまさっている。

つぎに兵庫ということばが人口に膾炙（かいしゃ）したのは、幕末になってこの地に兵庫奉行という役職がおかれたことである。

幕末にこの地が開港場に指定されたためで芙蓉（ふよう）の間詰（まずめ）の旗本が任命された。初代奉行に小笠原摂津守広業という人物が赴任するはずであったが、時の複雑な朝幕関係の事情のために実際の開港がおくれ現実に開港されたのは維新直前であった。最後の兵庫奉行は江戸から赴任せず、大阪町奉行の柴田日向守剛中という武士が兼務した。奉行としての役高は千石で、役料は現米にして六百石を給せられたというから、幕府の地方職としてもわるい

職ではなかったろう。

ところが、維新前には「兵庫」の地名のみがあらわれて「神戸」の地名はほとんどいわれなかったが、ただひとつ、

「神戸海軍操練所」

というのがある。

当時の幕府の海軍奉行であった勝海舟がつくったものである。

これははじめ幕府の官設のものではなく、官費は出ていたものの内容は勝個人の海軍塾のようなもので、汽船の操法を教えた。塾生も旗本御家人といった幕臣ではなく、ほとんど諸国の浪人者ばかりで、その塾頭が、土佐藩脱藩の坂本竜馬であった。

場所は、兵庫の生田の森である。ここに宿所を設けて、塾生を収容した。

塾頭坂本竜馬が、文久三年五月十七日に故郷の姉乙女に送った手紙に、この設立当時の事情がかかれている。

「このごろは、天下無二の大軍学者勝麟太郎という大先生の門人となり、ことのほか可愛がられて、客分のような者になっています。また、近いうちに、大坂から十里ほどはなれた土地に兵庫と申す所あり、ここに海軍を教える施設をこしらえるつもりです。ここで四十間も五十間もある船を作り、弟子ども四五人もあつめるつもりです」（口語訳）

竜馬はこのことがよほどうれしかったらしく、姉への手紙の末尾に、

「エヘンエヘンかしこ」（原文のまま）

と、おどけて書いている。

やがてこの塾が、勝や、竜馬の奔走で幕府の官立になったのは、元治元年五月二十九日である。

この日付で、触令が出ている。

「摂州神戸村に操練所おとりたてに相成り候につき」

という文章からはじまるもので、おそらく幕府の公文書に神戸村という地名が出た最初ではなかろうか。

— 13 —

練習生は、諸国から四、五百人もあつまったが、
このなかでたれでも知っている名をあげると、
坂本竜馬（土佐）
伊東祐亨（薩摩・のちの海軍中将）
伊達小次郎（紀州・のちの陸奥宗光）
などがあるが、ほとんどが過激ないわゆる尊攘の志士で、たとえば塾生望月小弥太（土佐）などは池田屋の変で新選組と闘って斬死し、安岡金馬（土佐）は蛤御門の変で戦死するなどほとんど政治結社のような色彩をおびてきたため、幕府はほどなく閉鎖してしまった。慶応元年の三月のことで官制化してから一年もたっていない。

その廃止の政令の文章は、

「摂州神戸村へ、御軍艦操練所御取りたて相成り候につき、有志のめんめん罷り出で、修行致すべき旨、せんだって相達し候趣きもこれあり候ところ、このたび同操練所は御廃止に相成り候。この段、むきむきへ、よりより達しおかるべく候事」

というもので、当時の激動する政治情勢のためについに流産となった。

私は、こんどの新聞連載に坂本竜馬をかくので、この神戸海軍操練所（神戸海軍所、神戸海軍局などともいう）のことをくわしく知ろうと思っているのだが、なにぶん十分な資料がない。とくに、生田ノ森に、全国（ことに西国方面）から四、五百人ものうるさい浪士があつまってきたときの様子や、神戸海軍屋敷の建物（おそらく生田神社の既設の建物を利用したのではないか）の様子も知りたいと思うのだが、どうも思わしい資料にあたらない。

なにしろ神戸という地名が政府機関の名に冠せられた最初の出来ごとだけに、おそらく神戸市でその跡に記念碑でもたてているのだろうと思うのだが、いちど出かけてみて、生田神社の福田さんにでも事情をきいてみたいと考えている。

（作家）

グッドナイトレディース

—TOR ROAD FANTASIA—

稲垣足穂
え・中西勝

紅いクラレットに、黒いスタウトに、金色のスパークリング・ワインに、更にリットル・セァターの舞台の球と六面体から成立った紳士の直角ダンスに時刻は移って、夜は幼きキリストの手に弄ばれる地球儀の廻転のままに更けてきた。終電車はポールの先から緑色の火花を零して、一日の敗残のともがらを、a、b、q、vの形にクッションの上に収容したまま東西の車庫へ帰ってしまい、神父様は、やおらガウンの裾をまくり上げ、葉付き人参をおしりに差し込んでから、テーブルのおおいを取って、石膏細工のエルサレムの上に青電気の月光をお当てになる。

棕梠の葉蔭に純白の胸や杏色の背中や絹張りの臀部やらが、無数のボットウルとグラスに入りまじり、青い光に砕けて魔宮さながらに渦巻いている場所を抜け出して、夕刻に下りてきたアスファルトの坂道を再び山ぎわへとテクって行く時、港の都会の中ぞらには童貞の月が照って、街上にはびこる白いものが疎らな星に向って物云いかけながら、ステップを踏んでいる。いやこれは「サフオ」の作者の云い方だった。ボクは、"Good night ! Ladies"のこの刻限、いつかの映画で観たように、ヴェニスの館の飾りつき鉄柵の門を出てちびくれた石段を幾曲りしてゴンドラまで降りて行った連中のように、こちらも縞の仮面をつけ、黒マントーの裾をかげ、ピーター

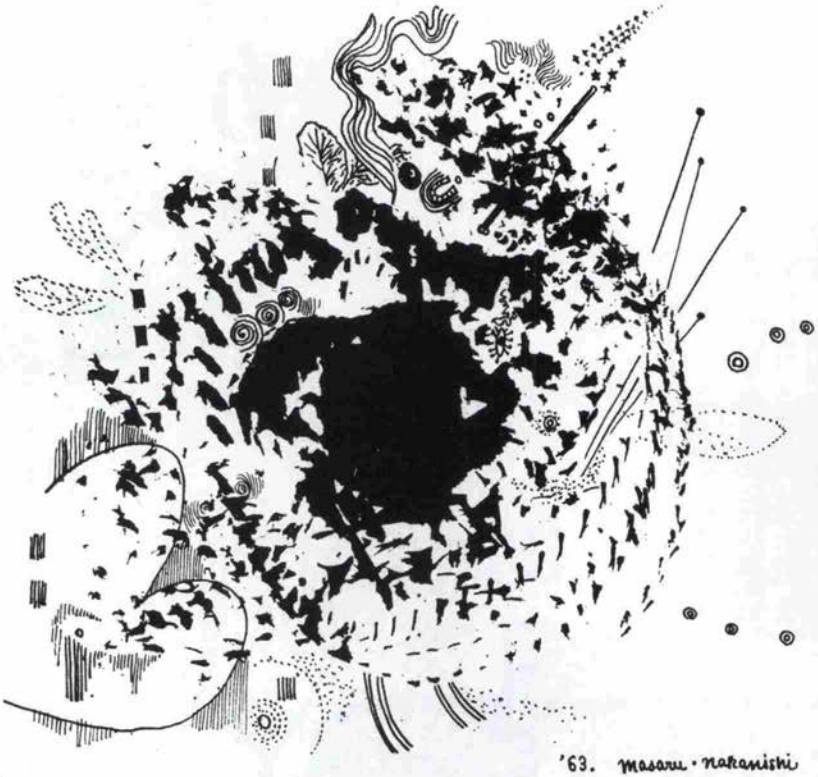
・パンや猫や蜻蛉や道化共と連れ立って、裏梯子を伝ってモータボウトに乗り移ろうとした時、木星族彗星ポンが近付いている夏至近い深夜の空が、倖いにして曇っていなかったならば、つまりそこが下町の反映による合歓(ねむ)の花色に染っていなかったら、こんな折こそわれらの頭上は申し分のない「六月の夜の神戸の空」ではないか、と云いたいのだ。

見たまへ！　一日ぢゆう責めさいなまれ、こづき廻された海岸寄りの高層建物たちは、さすが重荷にたえかね、噛み合いの気力も失せて、互いにゆらめきかしいで、吐息まじりに、眼には見えない放電を交わしている。こんな始末であるならば、裏山の花崗岩の低い垣と鉄柵に囲まれた芝生に、色とりどりの花々に飾られて昼間は狸寝入りをしている十字架や平石(ひらいし)たちも、いまは本性を発揮して、—そうだとも、なんでこんな猫被りどもに安眠が許されよう！　虫も殺さぬ顔をして取澄ました石碑としたことが、相互いに顔負けするような吸引と反撥の火花を散らし、ここを先途とばかり彼らの「生」を貪っている。さてかなたに拡がっている水平線は、その左寄りに頻りに雲を焼いてイナビカリがする陸影を載せ、それぞれのケビンから淡い灯影を洩らして放心している大小の碇泊船を散らばらせた港内を前景にして、斜面を占めた危篤市街もろともに、恰もそんな卓上模型を傾けているように、徐ろに東に向つて廻転していたのが、いまは直立してしまった。いや絶壁になったのは宵のことで、すでに完全に裏返しになっている。何故なら、赤ばんだ半月が今はこの大テーブルの端っこにおしつけられているからだ。

この逆さになった盤面に、ぎらぎらまなこのセダンやリムジーンやライトカーが同じく逆様に吸いつき、このような錯綜した面上に縦横に引かれた溝にそうて、格別落ちもしないで、せわしげな蟻のように左右に行き違い、はすかいのジグザグコースを採ったりしている。こんな修羅場のさまに引きかえて、ふとこうべを上げて仰いだ処は、まあ、何という事か！　かの暗碧の大空は、この汗ばんで寝苦しがっているまんまるい地球を抱こうとでもするかのようにのしかかって、星々は、その座を乱したのであるまいかと怪しまれるば

かりな、ファンタスティックな物狂おしい位置を採って燦(きらめ)いているあの末来派の驍将マリネッティが、「吾等は世界の最先端に立ち星に向って戦いを挑もうとする者である」と云ったのは、こんな夜のことでなかったろうか？

ポン彗星が今頃どの辺まで来ているか知る由もないが、あしこに黄色く光っている土星の内部では、いましも長い髭をつけた哲学者が分厚い本を閉じてのびをしながら立上り、彼の球形の部屋のドアをあけて出てくると、カント流に両手をうしろに組んで、何やら瞑想に耽りながら、環の上をあっちこっちに散歩しているけわいがする。あゝわれらの六月の夜の神戸の空！



— 9 —

れんさい随想／⑯

神戸のこと 手当り次第

淀川長治
え・中西勝

「そんなアホなこといわんといとん。わて、あのとき、ちゃあーんと聞きましたで、あんまり、ひとバカにしなはんな」

電話口で目を泣きはらしてお染めはんが旦那に、わめきたてているのを聞いた。うまいこと言われ、そのあとあっさり捨てられたんやなァ……子供なりに私はそれがわかって芸者てアホやなァとつくづく思ったのが、やがて中学の一年生のころになると、旦那にだまされて、生れた子供を、まあこれでもええやないかと、ミカン箱にその赤ん坊の死体、生れてすぐ死んだその小さな肉のかたまりを、寝かして白い布を上からかけるとき、その芸者の目からポタポタと涙があふれるのを見て、こんどは芸者て可愛想やなァ、そう思うようになって、さんざいなんて一生すまい、そう決心したものだった。そんな芸者町の、置屋（おきや）に生れ育ちながら、このあいだ、ある呉服屋のパンフレットに、検番と書くべきところを見番と書いて、それもそのパンフレットが送られてくるまで気がつかなか

ったとは、自分もよっぽど当今はやりのあて字病に感染したということと併せて、ああ、あの西柳原時代ももう私の記憶から遠くなったものと、ふんわりとさびしくもなったものである。

×

西柳原から会下山に移り、その会下山から熊内四丁目に移るあいだの二カ月ばかりを、会下山館という今でいえば団地住宅のはしりのようなアパートに移り住んだことがある。

会下山公園の入口の登りかかった坂道のかたわらにあって、ここからは新開地の湊川公園にはひと走りで行けるので私にはとても便利なところであった。

ここには中庭の植えこみの向うに別棟の当時としてはなかなか洒落れた食堂があって、いつも四、五人の客がたむろして無駄ばなしに花を咲かせていた。ここの洋食がまた実においしい。私は昼も夜もよくここに馳けこんだのであるが、あるとき「あのひと、ちりがんやわ」と若い男がそんなことを相手の二人の男に話している。「そやけど、かたっぽのほうは、えらいちんちりがん」そこでこの三人が腹を抱えて笑いころげたのであった。この三人はひと目であれだということもわかる。体が大きくて腕も太い、まるで兵隊のようなのが金歯を光らせてニヤリと笑って和服の片袖をまくって二の腕をによっきり丸だしにしながら女形のような手つきで手先きを振った。他の二人は小男で、そのうちの一人がリンゴをナイフでむきながら、その手を止めて片ほうの手を「いやーねえ」というかっこうで口にもってゆく。聞くともなく聞いているうちに「ちりがん」が美男子で、「ちんちりがん」がぶ男だということが解ってきて、うまいこと言やはると私はひとりで感心したものだった。

×

熊内に移ってからは家の前がピーコックさんというイギリス人、すこし行くとハリールというドイツ人。そしてそのハリールという家には私とおないどしくらいの息子がいて、いつのまにかそのハリール君と仲良しになって、アメリカの映画雑誌を五、六冊かかえて

は持って行って、その解らぬところを赤くしるしをつけて教えてもらったものだった。この家に行くと家じゅうが犬の匂いとバターの匂いがして、これが西洋人の匂いというものなのだろうかと妙なところで感心したりした。もっともこのハリールの家は犬と猫と人間がおんなじくらいの居住権を持っているような家で、椅子の上、テーブルの上、いたるところに大きな犬や猫が、がんと頑張って押せども突けども立ちあがるけはいがない。

ある日、私はハリール君の胸に妙なしるしのついたバッヂを見たそれは地蔵さんのマークそっくりで、それがヒットラー青年クラブのバッヂと知って「あんた、ヒットラーを好きなんですか」この人と話をするときは日本語で話すことを許さない、私がすこしでも英語会話が上手になるようにと、いつも会話は英語にきめ、日本語を口にするといくらいくらの罰金を支払うことになっていたのである。そこでそう英語で聞くと、ハリール君、たしかあのころ二十二歳くらいだったと思う、その彼が「ハイ、ヒットラーはとても偉い人なんですよ、私も私の姉さんも、みんなヒットラーの青年クラブにはいっているのです」そう英語で答えるときの彼の顔には純粋な美しさがあふれ、いかにもそれを誇りとしている様子があった。

そのハリール君に私はアメリカの映画雑誌を見せながら、ここの意味はこうなんでしょうか、ここは、こうなんでしょうかと、たどたどしい英語できくうちに、モーリス・シュヴァリエの「今晩は愛して頂戴な」Love Me Tonight やハロルド・ロイドの「ロイドの活動狂」Movie Crazy やジョン・フォード監督のロナルド・コールマン主演の「人類の戦士」Arrowsmith あたりになると、ハリール君はすっかりアメリカ映画ファンの生地をまるだしにして自分から日本語になってしまって、得意気に私に話して聞かすのであった。ジョン・フォードの新しい映画をうれしげに語り教える彼の胸にヒットラーのマークのバッヂが輝いていたとて、そのころ、私はなんとも不思議には思ってもみなかったのであった。

（映画評論家）

連載随想第十一回

目ダマ

阪本勝

え・小松益喜

先日ある知人にまねかれ、ホルモン料理のご馳走になった。

三宮にあるその店にはいると、異様なにおいがぷうーんと鼻をつく。二階へあがって、メニューを見ると、何十種類の献立がずらりとならんでいる。女の子がきたから、どこの出身だと聞くと、オキナワだといった。

メニューのまっさきにあるのは、牛の肝臓（キモ）である。

つぎに列記してある献立に私は驚嘆した。

雄牛のペニス（陰茎）

雌牛の子宮

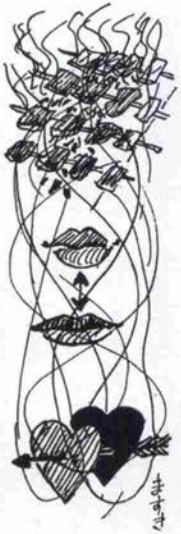
尻の穴

ブタの鼻

ブタの耳

ブタの唇

などが、ずらりとならんでいて、ホルモン料理に初見参の私の目を射た。さて何を注文しようか牛のペニスはどんな味かな、とちょっと気持が動いたが、何が何でも、じぶんじしんがペニスを持っていながら、牛のペニスを食うなんて、むざんなことに思われて、やめた。それでは子宮はどうか。「あのねえ、オカアチャン、ボク、オカアチャンのポンポンから出てきたんでしょ」てな、少年時代の思い出が頭をかすめて、これもやめた。



鼻も、耳も、唇も、みなやめた。すると、たべるものは何か。キモばかりである。そこで私はキモ（レバー）を注文した。生れてはじめてのたべものである。ところが、こいつ、すばらしくおいしかった。しかしそれをたべながら、私は何かしら悲しく、さびしかった。牛の肝臓を食うようなあさましい人間になったか、など思って。

あくる朝起きてみると、体はピンピンして、二階へあがるのに、三段ぐらいとびあがる意気ごみである。散歩すると、坂を犬のように走りあがるいつもの疲れをぜんぜん感じない。「おかしいもんだねえ」と私は妻に言った。「たったひと晩、牛のキモを食ったら、こんなにゲンキがついた。人間の肉体なんて、いいかげんなもんやな」

妻はニヤニヤ笑っていた。塩コブや、めざしで毎日亭主をもてなしていた妻たるものの、思いやりの無ささが、わかったのかもしれない。妻というものは、ときおり、亭主にホルモン料理をたべさして、坂道をウサギのように飛びあるくように飼育する義務があるのではなかろうか。

わが身について考えてみると、毎日、毎日、塩ジャケ、塩コンブ、ときどき白い磯ざかな、ワカメなどばかりで、スタミナの源泉を恵みたまわる

ことは、まず無いといっていい。しかしそれが私の趣好だから、妻としてはいたしかたないことだろう。

そうこうしているうちに、大問題がおきた。神戸市職の委員長、佐々木大蔵君が、ある日、芦屋の山荘にたいへんなご馳走を持ってきた。そのご馳走とは何だったか。

ブタの目ダマだったのである。

ブタの目ダマは、ずいぶん精のあるものだそうだ。かれは、シチューにした目ダマを私にとどけてくれたのである。かれは言った。

「サカモトさん、あんた塩コブだけたべていてはあきまへん。ときには、こんなブタの目ダマたべなはれ。精が出まっせ」

私はその友情に感激した。そして、わが家のサロンで、ブタの目ダマをしみじみと見た。ブタの目ダマは私をじいーッとにらんでいた。これを食わなければ、佐々木のダイさん（オオクラという人もある）の友情にそむくことになるし、これを食うには、ワガハイの胃がテイコウを感じているさて、いかにすべきや。

私はブタの目ダマをあらためて観察した。タイの目ダマは、たびたび見たこともあるし、たべたこともあるが、ブタの目ダマははじめてだから、頭が変になった。

さて、食おうか、食うまいか、目ダマをまえにして、ハムレットは考えた。目ダマと簡単にいうけれども、カサは、いっぱいのシナそばぐらいある。こいつは、そうかんたんにはいただけない。

私はこまって、ダイさんに言った。

「キミ、こんなご馳走こまるな。ブタの目は天下の美味だろうが、どうも食う気になれん。だれか呼んで、たべてもらおうか」そんならそうしよう、というわけで、ふたりで考えたあげく、神戸市に住むひとりの女性を思いうかべた。

電話をすると、かの女はさっそうとやってきた「これたべてくれないか」とたのむと「エエ、たべたるわ」といって、ムシャ、ムシャ、たべてしまった。それがブタの目であるのか、何であるのか、本人には わからなかったに 相違ない。しかし、ともかくたべた。たべてケロリとしていた。

さて、ここで、私は思い出すのだ。このごろ世間でいう、ドライとか、ウェットとかいうコトバである。この女の子は、たべものをたべるとは何を意味するか知らなかったのだろう。たべものとして出されたものを、そのままに、たべただけのことで、唇と舌と胃があれば、けっこうたのしかったのだろう。

今の世のなかにはそんなことが多い。しかしオトメたちよ。もうすこし、ものをよく観察してたべなさい。スシヤでスシをたべるなら、タイか、イワシか、マグロかぐらいのことは判断してたべなさい。オトコの子とつきあうなら、この子、イワシか、タイか、マグロか、ぐらいのことは判断してつきあいなさい。オンナの子よ、あんたがたは弱すぎる。オトコの子にくどかれると、すぐまいる。「ボク、キミがすきや」なんていわれると、ああうれしい、とすぐ唇をゆるす。それではいけません。その唇でオトコの子はブタを食うんですよ。ストリンドベルヒいわく「ブタを食った唇でせっぷんする。これを恋愛という」

それはそうだけれども。

（随筆家）

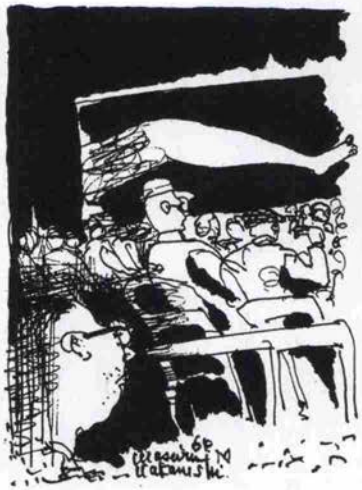
連載随想第二十八回

わからない……。

白川　渥
え・中西　勝

×

このところ、私は殆ど映画館へはいったことがない。観たいと思う映画がないでもなかったが、そのレジャーの時間を全部ゴルフの方へふり向けた恰好である。作家稼業の上から言えば、ゴルフよりも映画の方が仕事の上に役立ちそうだ。その勉強を怠けてしまったのは、むろん絶大なゴルフの魅惑のためだが、とは言え、あながちそのせいばかりでもない。セックス映画が野放しの現在街で最も不潔な地帯は、映画館街である。白昼の街頭に立ちならんでいるあの臆面もない看板、あの恥知らずの宣伝文句。そこは、最も薄ぎたない臭気の立ちこめている都会の恥部である。むろん、私はピュリタンでもモラリストでもない。いや、稼業柄、人一倍、人間の薄汚なさや暗黒面や悪魔性と附き合っている人種である。ありようは、だからこそ、もうタクサンだと言う気がするのだ。



牡丹（ぼうたん）の一つの花を見つくさず

誰の句だったか、そんな秀吟がある。産婦人科

の医者の中には、案外に高雅な趣味の人が多いそうだ。現に私の知人の老産科医も、バラづくりの名人だ。人間のバラばかりを見つめているやりきれなさが、この人にこのような視点転換をはからせたかと、忖度してみたりする。都会の恥部からはればれとした緑のコースへ。……言うならば、私のゴルフ行きもそんな同じ反作用かもしれない。

×

映画は観ないが、テレビの方はよく観る方だ。うっかりすると、最終番組まで附き合ってしまう。私の好きなプログラムはノンフィクションものとスポーツである。ドラマは時代ものばかり。現代ものは稼業の役に立ちそうだが、これも全く不勉強である。

私は、「藤村」時代からの阪神ファンだったが、隣家にスタンカ君が引き越して来てから南海ファンになった。はじめは近所附き合いと言う程度の応援だったが、だんだん文字通りにファナティックになった。今年の阪神南海優勝争いがつづいた前後十日ばかりは、全く仕事が手につかず、「近所迷惑」とはこのことかと苦笑したものである。いつの頃からか、私は又相撲気狂いになった。たぶん「若ノ花」が関脇になった頃からであろう。彼が負けた日は愴然として夕食も喉を通らぬあんばい。ここぞと言う一瞬、つい大声を発して怒鳴ってしまう。あまり怒鳴りちらすので、家人から他所での観戦を禁じられている始末だ。ファン心理とは、いったい何であろう。この非合理な心の傾斜は、愚かでもあり、哀れでもある。まるで運命共同体である。その若ノ花と、彼が大阪場所で優勝した時、「大相撲」誌の依頼で一夕対談したことがある。ミナミのさる料亭だったが、私は柄にもなくテレてしまった。宝塚ファンなるものが踊り子に血道をあげている図もコッケイだが、少女のようにあからんだあの夜の私も同じ部類で、全くザマアなかった。

×

ノンフィクションものに「夫婦善哉」や「おのろけ夫婦合戦」と言ったユカイな番組がある。あれに出場する夫婦の気持がわからないと人は言う。一種の露出狂だろうと言う説もある。私も首をかしげる一人だが、いや待て、作家などという人間にも、多少はその症状がありはしないか。マスコミの註文に応じて、すっ裸のアクロバットを演じている文学は論外だが、純度の高い文学には、共通して何らかの自照的告白的要素がある。作者が己れをマナイタに載せてゲロゲロを吐いてみせる私小説など、偉大なる露出症状と言うべきであろう。

現代もののドラマは観ないが、いま十チャンネルでやっている「風来坊先生」だけは、原作者としていやでも附き合わざるを得ない。あまりにも原作のイメージとはかけはなれたドタバタ劇である。原作者のあずかり知らぬ場面が続出してくる。聴視者からおかど違いの抗議の手紙が私の方へ舞い込んだりする。好きな「私の秘密」と同時刻なので、ちょいちょいその方へダイヤルを廻したりするほどのユーウツな一時間だが、先日来宅したプロデューサーの話では、意外にも、この番組の視聴率が甚だ高いとかで、三ケ月の予定が五ケ月に延びた。わからない。……

（作　家）

詩心象

詩・安水 稔和
画・石阪 春生

拡げた両手で囲んだ円。
指先で宙に描いた円。
親指と人差指で作った円。

指先ほどの
豆粒ほどの芥子粒ほどの
円というより点ほどの。

春の陽ざしのなかで
光っている揺れている動いている
大きい円や小さい円。

くっついて離れてくっついて
たくさんの円のむこうに
ずっと見えている人。

犬のように弾んで
ぼくの言葉とどくかな。
まっすぐにあの人に。

神戸12カ月

六甲山上の迎春（1月）

岡部伊都子

冬山が好きである。

けれど、きびしい登山の訓練をしたことがないだから、ほんとうの冬山は知らない。遭難者はいたましいけれど、よく訓練や準備をした人びとがつねに困難な冬山にのぼろうとするのは、美しい行為だと思う。ほんとうに自己を直視し、自己の限界を思い知るきびしい行動だからだ。〝山がそこにあるから〟のぼるといった、単純な感じのものではない。

そうしたきびしい自分との闘いなしに、らくらくケーブルであがってのことだから、何にもならないようだが、やはり、山上の冬はすばらしい。六甲山はすこしひらけすぎて、夏のさわがしさがやり切れない。

大晦日からのぼって、ホテルの夜を読書と音楽にすごし、ほのほの明るむ窓に額をくっつけてあたりを眺める。対岸の山、大阪湾、そして遠く淡路の島影……。夢のように浮びあがって、雲や雪や、霧にけむっては晴れ、晴れては波のキラめきが目を射るといった風景に、新年の太陽を迎える自然の儀式が感じられる。もちろん、自然が儀式をするはずがない。ただ、人間の心の在りようが、自然を壮厳にみせるのだ。

ひとときも、じっとしていない太陽は、ぐんぐんあたりを明るくひらいてゆく。闇に沈んで全然見えなかったものが、見えてくる感動は毎朝のことながら、それが、新春の太陽だということで、意味が深いのだ。照らしだされるものみな、互いに新しい年の太陽の光りを反映させ合いながら、いい仕事をしたいと思う。

□随想□

想い出

遠藤　周　作

もともと話をするのが不得は私の本来の仕事ではないのするのだか、関西の大学からく承諾してノコノコ出かけて京都や大阪での仕事であって宝塚ホテルにとる。

阪急電車に揺られながら窓近辺の黒褐色の土をみなれたが鮮やかに映る。「ああ、帰ってまだ慶応の予科生だった頃、養失調の東京での生活に疲れすし詰電車の中でこの土の色ぼしたのを思い出す。この赤もあたたかく豊かで大好きだ

電車が仁川の駅にとまると

五分とかからない道を「周ちゃんは二時間かかって帰って来る」と母を驚き呆れさせたものだった。大きなランドセルを背負ったまま、蟻が昆虫の死骸を自分達の巣までせっせと運んでいくのを、無事にその作業が完了するまで眺めていたり、よその家の垣根のバラの蕾を一つのこさず数えてみたり、ついでに害虫も退治してやり、くたびれたら樹陰で昼寝もし、川原でめだかをおどかし、兎に角、目につくものには何でも交き合ったのだから一時間でも二時間でも経つ筈である。

学校では

「宿題やっていないものは？　又、遠藤か、立っとれ」

「後で騒いでいるのは誰か？　又、遠藤か、立っとれ」

兎に角「又、遠藤か、立っとれ」と拳骨の雨で終始した。母に懇々と諭されて授業中、一生懸命、黒板をみつめ先生の言われる事を聴くのだが、どんなに努力してもさっぱりわからない。たまりかねてあたりをきょろきょろしはじめる。友だちは皆、温和しく先生の話を聴いている。前に座っている奴の首すじを尖った鉛筆でチュッチュッと突いてみる。「キャアー」驚いた友だちは、突っ拍子もない声をあげる。「ハックショイ」私はあわてて誤魔化すため嚏をする、が先生の眼は鋭くこちらをにらんでいる。

「こらあ、又、遠藤か、お前はどうして……」

放課後、皆帰ってしまった教室で一人残された私は、さすがに悲しくなって「なんで僕はせいでもええことばかりして叱られるんやろか」と考え込んでしまった。

此頃の心理は、今考えてみてもわからない。要するに泥だらけになってほっつき歩いているワンちゃんと何らかわりがなかったのである。二つ違いの兄に今でもよく云われる話だが、雨降りの日に傘をさして如露で庭の草花に水をかけていた子供なのである。兄貴は秀才で、中学四年から一高、東大、高文というその頃の秀才コースを進んでいった男なのだから、私の馬鹿さ加減は余計めだったのだった。だが兄は私のことを心配してよくかばってくれた。そして母は唯一の保護者だった。バイオリニストを志ざしていた母は、結婚し子供ができ、二人の男の子が取っ組み合いの喧嘩をしている傍でも毎日欠かさず何時間かはバイオリンを弾いていた。何と気の強い母親なのか私がびっくりしたことがある。例によって教師になぐられ、その時は相当ひどいわるさをやったのか、前歯をへし折られて家え帰った。それを見て母は顔色を変えて学校えどなりこんで行った。「息子を教育してもらうために学校えやっているのであって傷をつけてもらうためではない」と。「謝れ」「謝る必要ない」教師も相当頑張ったらしいが、兎に角、謝る迄はここを動きませんと座りこんだおばはんに根負けしたのか、結局、母は自分の言い分を通して引きあげてきた。

「お前は人より本を沢山読んでいるから偉い偉い」と劣等感のかたまりみたいな私をほめ、おだてて例えそれが漫画であろうと講談本であろうと本だけは欲しいだけ買い与えてくれた。

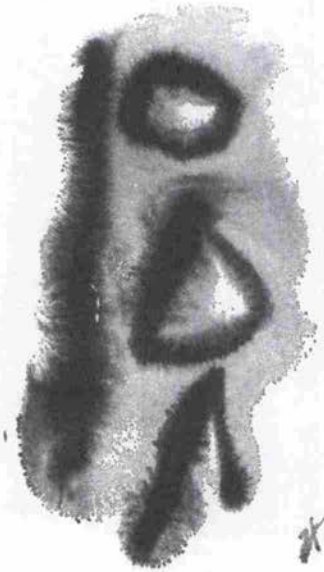
その母も今はいない。私にとって母の想い出はやはりこの仁川の月見ヵ丘の頃の元気な頼もしい母親がなつかしい。

〈作　家〉

□随想□

トア・ロードの想い出

佐藤愛子
え・津高和一



神戸というと私はトア・ロードを思います。といっても私の思い出すトア・ロードは、二十三年前のトア・ロードである。戦争がはじまり、緒戦の華々しい勝利が次第に傾きはじめた頃のトア・ロードである。物資はそろそろ欠亡しはじめ、贅沢は敵だなどいう標語が幅を利かせていた。だがトア・ロードの閑寂でエキゾチックな店々の構えには、どことなくロマンチックな贅沢の名残りがあって、殺風景な時代に倦んだ私の心を潤してくれるようであった。

私はあの広い坂道と、そのつきあたりにあるトアホテルの赤い屋根の遠い全景を坂の下から眺めるのが好きだった。寒い日も曇った日も雨の日もあったと思うが、私の中にはトア・ロードというと必ず初夏の光に溢れた坂道と、絵のように鮮かな青空の下のホテルの赤い屋根が浮かんでくる。それは美しいというよりは、失われてしまった平和への憧れを、私の中にかきたてるのであった。

私は東京に嫁いだ姉の依頼で、あの坂の途中にあった子供用品店へ、パラシュートの残り布で作ったというおしめカバーをよく買いに行った。鰻の皮で作ったというハンドバックを買ったこともあるし、ステンレス製の帯どめを買ったこともある。二十才の私はいつもお腹を空かしており、父の古服で作ったスーツを着て、姉のお古の靴を穿いていた。たまにドイツの海軍士官などが、連れ立って歩いてくるのに出会うと、胸をときめかし

ながら顔をそむけた。ドイツの男性は、目と目が合うと、必ず自分に気があるとひとり合点をするから、視線が合わぬように注意して外らせていなければならぬ、と知り合いの老夫人に教えられたからだった。しかし戦争で屈強の青年たちが出て行ってしまったあと、よれよれの国民服を着て眼鏡などをかけ、栄養失調気味の男ばかり見馴れた目には、ドイツの海軍士官は目がさめるばかりに美しく、雄々しく思われたのである。

その頃、私の女学校時代の友達の中には、ヒットラーに熱を上げていた人がいた。また天皇陛下に魅力を感じるという人もいた。「ええのん、ええのん、私は遠くから思ってるだけで倖せやのん——」

とヒットラーを好きな人はいった。私たちは偶然、トア・ロードで出合い、ユーハイムへ行ければケーキを食べさせてくれる、というので、わざわざ海岸通り（？）のユーハイムまで出かけて行った。もうその頃はコーヒー一杯にしろ、思うように飲めなくなっていた。ユーハイムにはドイツ人のおじいさんが一人だけいて、客は一人一人そのおじいさんの前へ行っては一皿のケーキを受け取って来て食べるのである。

私たちは何とかして、もう一皿ずつ食べさせてもらう手はないだろうかと相談し合った。私はおじいさんを見てにっこり笑い、

「ハイル・ヒットラー」

といってみたが駄目だった。おじいさんはうさんくさそうに色あせた瞳で私たちを眺め、プイと横を向いてしまったのである。

戦争がいよいよ、暗い様相を滞びて来はじめた頃、私は雪に閉された信州伊那町で、不自由な二階借りの生活をしていた。くる日もくる日も灰色の空から陰鬱な灰色の雪が舞い散って、私たちの上にはもう二度と明るい平和が訪れることはないかのように思われる日々だった。私は毎日、所在ないままに町の古本屋から買って来た小説を読んでいたが、その中に谷崎潤一郎の短編集があって、黄色い洋服を着た若い女主人公が、籐のケーンをふりながら、颯爽とトア・ロードを下りてくるという描写に出くわしたときは、昔の恋人に会ったように胸が轟いた。警戒警報のサイレンと食糧不足と雪と寒さの中で、輝くばかりのよき時代のトア・ロードが、黄色い服を着た女性そのものであるかのように私の中に飛び込んで来て、一瞬、強烈な悲しみともなつかしさともつかぬ感動で胸がいっぱいになったことを思い出す。

五年ほど前、旧友が上京して来たので、トア・ロードのことを聞くと、

「ああ、あすこはもうあかん。さびれてしもてねこのごろはセンター街がのさばって……」

ということだった。

我々大正生れの戦中派には戦後に生れたものは何であれ（町であれ人間であれ）ケチをつけたくなる心理がある。どの町もどの家も昔ながらの個性あるたたずまいをなくして劃一的になって行っているのを見るにつけ、私はトア・ロードが現代風に繁栄しないで、昔の姿のまま、さびれて行ってるということを、むしろ嬉しいと思うのである。

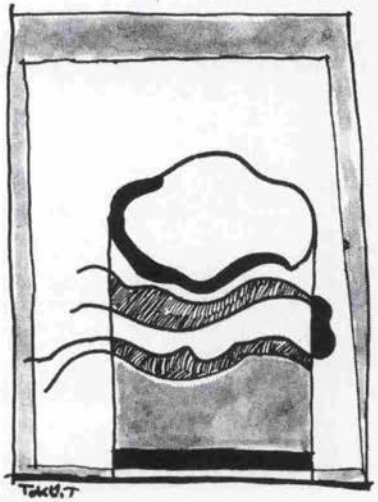
〈作家〉

□れんさい随想〈1〉

東京→神戸 引越し騒動

——この連載随筆に人工着色剤や合成甘味料は一切含まれておりません——

筒井 康隆
え・田中 徳喜



「ふるさとは、遠きにありて思うもの、近くば寄って眼にも見よ」という諺がある。

おれが神戸に引越そうと思い立った理由の第一は、ここが妻の郷里であることとは別に、なんとなく神戸に対して故郷のような懐かしさを抱いていたからである。それはまた、東京に住んで七年、この猥褻な大都会に住む連中の精神的イモぶりに、つくづく愛想が尽きるとともに、ますます神戸のシャープな文化が好ましく思えはじめたからでもある。加えて東京に、大地震の予兆、スモッグ、暴動などという末期的症状があらわれてきた。特におれは、地震は大嫌いである。だいいちに地震というのは、非常にいやらしい。災害の状況や勃発する時間・空間に対して予測というものが立たないのである。おれたち家族、おれと妻と三才半の長男の三人は、東京を脱出することにした。

日本で、いちばん地震の少い所は兵庫県なのだそうである。確かめたわけではないが、妻がそういうのだからしかたがない。こういう面倒なことに関しては、おれは妻のいうことを信用することにしている。どうせ誰かを信用しなきゃいけないし、誰を信用したってたいした変りはないからだ。うまい具合に妻の実家の牧場が神戸垂水にあり、その近所に空地があった。おれはここへ家を建てることにした。

まだ、金もろくに貯まっていないうちから、おれは間取り図を書きはじめた。建売り住宅の狭さをいやというほど味わっていたから、少しでかい家にしようと思い、この部屋は八畳、ここは六畳などと、ろくに計算もせずに決めていった。ところがここで、おれは無知ゆえの失敗をやらかした。

頭に思い浮かべる部屋の大きさの目安となったものは、現在もまだ住んでいる東京神宮前の、豚小屋的建売り住宅の、部屋の畳数であった。とこ

ろがここの畳は、団地サイズであった。二尺数寸×四尺数寸の、日本一小さな畳だったのである。おれはこの間取り図を持って神戸に帰り、大工の棟梁に渡した。建築費を安くあげるため、おれは請負の建築会社ではなく、受取りで仕事をする大工の棟梁に工事を頼んだのだ。この棟梁は昔気質で真っ正直、おれはいわばその職人根性に惚れたわけでもある。

場所は国電垂水駅の真北、海岸まで歩いて十五分という山手の石垣の上にある百坪ほどの土地であって、むろん眺めは非常によろしい。ふたたび帰ったのは地鎮祭の時である。自分の家を建てるための地鎮祭は初めてであるから、この時は妙に湿っぽい、おかしな感動があった。この地鎮祭の次は、棟上式の時に帰ることにしていた。

棟があがったというので、おれたちはまた神戸へ帰ってきた。空地だったところへ、馬鹿でかい家の骨組ができていた。おれはおどろいた。

「これは、なんですか」

「なんですかということはないでしょう。あんたの家ですよ」

「おれはこんな、病院みたいな馬鹿でかい家は注文しなかった筈だが」

「何いってるんです。あんたの書いた間取り図通りですよ」

畳の大きさが、東京の団地サイズと、神戸とでは違っていたわけである。こちらは、三尺数寸×六尺数寸つまり半坪よりもわずかに広いわけで、東京の畳と比べれば面積的に倍の大きさなのだ。サン・テレビの「トーク71」に出た時、西条凡児が、それは「神戸間」というのであると教えてくれたが、これはもちろんでたらめである。

さて、こういうでかい家が建ったために、裏庭へ行くための通路がなくなってしまったり、隣家とくっつきすぎたので境界線の問題が起って揉めたり、厄介なことがどっともちあがるのであるが、これもあとの話。さしあたっての問題は、家がでかくなった分だけ予算がオーバーし、金がなくなってしまい、残りの建具代や設備費その他に要する資金のあてもなくなってしまったということであった。だいたい東京で買った建売り住宅だって、ローンがあと三年分も残っているのである。銀行なんてものは薄情なもので、おれみたいな水商売には絶対に金を貸してくれない。

しかたなくおれは、テレビに出て司会をやることにした。それまでおれは、テレビには出ない方針をなるべく貫いてきたのだが、金がなくてはしかたがない。司会をやりはじめた時、なぜ司会を引受けたのかというすべての取材におれは、金がほしいからだと答えたのだが、そのため「これはおそらく筒井氏の照れかくしであろう」などと書かれた。照れかくしではない。実情は右の通りなのである。

さていよいよ次回は、新しい家に住むためのわが涙ぐましき努力、神戸へ帰らんとして狂気の如く奔走する被害妄想的実存主義的不条理せんずり冒険大活劇の巻である。乞ご期待。〈作家〉

□ずいそう□

邂逅ひしこと

赤尾兜子〈俳人〉

三月の異名を早若咲月（さなさつき）といい私はこの呼び名を好んでいるが、その十一日夕、私たちは、神戸トア・ロードの中華料理「東天閣」に集った。

私たちとは、陳舜臣、司馬遼太郎、吉田弥寿夫と私をふくむ四人である。昨年の初冬ごろ、私らが卒業した大阪外国語大の国文学の教授であった長谷川信好先生が勲三等の叙勲を受けられ、そのお祝いの会をしようという話が出たが、お互いなかでも多忙な陳、司馬両氏の日程にさしさわりもあって、のびのびになっていたのが、この日、うまく集れたのである。

すでに知る人々には知られていることだが、大阪外語の入学の年の順からいうと、陳舜臣氏が四人のうちでは、最もはやく、一年下に司馬遼太郎氏と私。そして二年遅れて吉田弥寿夫君となる。

長谷川信好先生の国文学の単位は必修だったので、四人とも受講、どのくらいの点をもらったか正してみたことはないが、いずれにせよ、れっきとした教え子たちである。

長谷川先生は、京大国文学科出身で、「萬葉集」の研究が専門だが、歌誌「帚木」（ははきぎ）の同人で短歌も作られ、大阪外語大を定年で退官、名誉教授になられてから、いまは、梅花女子大の国文科の学科長をしておられる。大阪・桃谷の旧家の生まれ、神戸とはあまりなじみがないのだが、「中華料理は神戸が旨いです」と大阪から来ていただいた。料理の選択は、〝通〟の陳氏にまかせて段取してもらった。

この四人は、年に一度くらいは、どこかで会っているが、やはり恩師をかこむと、話が一段とはずむ。

記憶力のいい陳氏が

「教科書を忘れてきた学生が一人いて、先生、一時間、かれを立たせてみっちりしぼられたのを覚えていますよ」というと、先生そこで、大苦笑。

座談の名手、司馬氏は、どんどん話をすすめてゆき、ついには

「先生、関西、それもかなり限定された範囲での話し言葉に発音を長くひっぱるものがありますね。それは、どうしてそうなったのか、いま考えているんです。仮説ですが、阿波弁が入ったのではないかと……。どうでしょう」

と質問の形になってしまったり……。

吉田君は、大阪外語大の留学生別科の主任教授、歌人で、一家言ある人だが、珍らしくこの日は、おとなしい。

トア・ロードの「東天閣」で。左より司馬遼太郎・赤尾兜子・長谷川信好師・吉田弥寿夫・陳舜臣氏。

あまり話がはずんで、卓の上につぎつぎならぶ佳肴の方が、うっかり冷めかけたりするくらいだった。

四人それぞれ、先生が持参された色紙に、所望の漢詩や短歌や俳句を揮毫、心から祝意をおくった。あとは流れてムーン・ライトへ。先生も十一時ごろまで、われらの放談にまじって行をともにされた。

□色紙より　三月十一日

梅花　盡くる　無し
司馬遼太郎

春風吹不　尽総是　夕陽情
陳　舜　臣

師親指　帰路月　掛一輪灯
陳　舜　臣

若き日に　薄氷踏みし
血温かな
兜　子

邂逅ひしこと
生きてこしことの
確かにて道に鶏
頭あかく
弥　寿　夫

□エッセイ□

神戸の女性たち

田辺聖子〈作家〉
絵／たかはし・もう

〝お聖さんまで食べたらアカンでェ〟

神戸の女流は多士済々、どうもホカの町より、人材が多い気がする。

こんなにノビノビと、女の子が仕事をしている町はない。その点でも、神戸はユニークな風土で私が東京や大阪で自慢している点である。

「まあ、こんなに女の子が活躍できる、というのは、男がえらいさかいやろ」

とカモカのおっちゃんは、いっている。

「男が了簡せまく、気が小そうて、古いアタマやったら、女の子が出ようとすると、モグラ叩きみたいにコツン、とやるやろ。しかし神戸の男はよーしよし、やりなはれ、とあと押しする。男がえらいのや」

ということである。

私もちょっぴり、そのあとについて神戸の男の讃美をするとすれば、それは、男が、自分に自信があるからである。自信がなかったら、女の活躍をそねんだり、足を引っぱったりするであろう。

そういって神戸の男性の一人にホメたら

「いや、そんな。自信なんて。——ただもう、女の人の活躍がまぶしいばかりで」

と怖ろしそうにいっていた。しかしこの点に関しては、「マカン・ブッサール」の会員の一人、藤本ハルミさんも、

「たしかに、男の人がやさしいようで、女も仕事しやすいんです」

と証言していたから、まちがいなかろう。

そうだ、編集部にたのまれていたのは、神戸の女性をホメることだった。しかし私の持論では、女をよくするのは男、男をよくするのは女、だから、双方、切っても切れぬつながりがある。

ところで、この「マカン・ブッサール」だが、べつにこの会員だけが神戸の女性というわけではないが、たいそう象徴的な存在だから、例に引かせてもらうと、美しきハイ・ミスの仕事もちが集まって、文字通り「おいしいもんをたべる会」を作っている。それが機縁になって、互いの仕事をたすけ合って、充実した成果をあげるようになっている。舞踊家もおればエディター、演出家、ディザイナー、女性実業家、などととりどりである。さまざまの仕事にいそしみながら、チームワークがとれていて、たとえば、モダンダンスの今岡頌子さんがリサイタルを開くと、演出家の岡田美代さんが構成を考えるとか、ディザイナーの藤本ハルミさんが衣裳を担当すれば、エディターの小泉美喜子さんが企画宣伝を引きうける、といった具合、これが藤本さんのファッションショーでも、同じようにみんなで応援するという仕組み、その彼女らの応援を、私も及ばずながら、またうしろから応援している、というところである。

日舞の花柳芳恵一子さんだとか、古典バレーの上月倫子さんだとか、会員にはすばらしい女流がいるのだが、会員外にも、タレントの小山乃里子さん、シャンソンの堀郁子さん、それに書道の望月美佐さん、……とこうかぞえてくると、(まだまだすばらしい女流は神戸にいっぱい)女が住みやすい、仕事しやすいところが神戸にはあるのかしら。そういう点でススンだ街に、ぜひ、してほしいと思う。それこそ二十一世紀の未来の街の条件なのだから。「マカン・ブッサール」はハイ・ミスのあつまりなので、「マカン・ブッサール」の応援団長をもって任じているカモカのおっちゃんは、気になってならないようである。同じく「マカン・ブッサール」の名誉顧問のつもりでいる高橋孟さんに

「○子ちゃん、くどいてもええか?」

といちいち聞き、孟さんは気むずかしく、

「いや、あの子はあかん。神戸の男性のアイドルやから」

「ほな、×子ちゃんは」

「あれもあかん。神戸の男性の希望の光や」

「△子ちゃんはどないや」

「あれもあかん。神戸の男性のマドンナや」

「ほな、会員外の××ちゃんは」

「あれは国宝。祀っとくもんで、くどくもんちゃう」

などといって、結局、みなダメで、カモカのおっちゃんも邪心をおこさず、女性の地位向上のためにひたすら応援する、ということにおちついたようである。しかし、それぞれの分野で仕事の幅を少しずつひろげ、人生と青春を充実させつつある神戸の女性たちは、神戸が誇りにしてもいいものの一つだと思う。友情とチームワークに支えられて、みな、その場その場で、けんめいに仕事にうちこんでいる。「男の人がやさしいから、仕事できるんです」という彼女らのけなげさ、まあ、幸せな世の中というのは、全くもう、男と女が応援し合うほかにはないのでしてね。それと、女の子がコツコツと、仕事の業績を通して、自分の存在を主張することに尽きるのだ。

しかしそれにしても、みんな、よく食べはるなあ。彼女ら女流の食飲もまた、いずれおとらず、ノビノビとさかんなものであって、それも男性方には、まぶしいばかりであろう。

再び Alphabet Avenue の L ロンドン

LONDON〔lándən〕

文 新井 満　コラージュ 石阪春生

本名・夏目金之助、後の漱石が東大英文を卒業し、松山中学と五高の教師を勤めた後、渡英したのは明治33年のこと。まだ33歳でもちろん〝猫〟や〝坊ちゃん〟を書く以前である。

知人も友人も居ないロンドンで彼はずい分苦労したらしい。今で言う自律神経の失調から来る胃病にとりつかれたのはロンドンへ行ったのが原因という説もある。

その漱石が〝倫敦塔〟へ行った時の叙述。

〝二年の留学中ただ一度倫敦塔を見物した事がある。その後再び行こうと思った日もあるが止めにした。人から誘われた事もあるが断った。一度で得た記憶を二扁目に打壊わすのは惜しい、三たび目に拭い去るのはもっとも残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思う。〟

久し振りにこの作品を読み返していてひっかかったのは最後の所。「塔」の見物は一度に限る。という下り。これ、正確に言うとちょっと違うんじゃないかな、と思うのだ。

☆　☆

青年漱石が訪れてから丁度80年後、同じロンドン塔を神戸の〝ときどき歌手〟が訪れる。

〝冬の初めとはいいながら物静かな日で、〝空は灰汁桶を掻き支せたような色をして低く塔の上に垂れ懸つて居る〟そんな午後だった。

ご存知の様にロンドン塔は、当初王宮として建てられたが、中世末期から国事犯を入れる監獄として使用され、今では血なまぐさい断頭台や拷問道具、政治犯を何十年も押し込めていた牢屋などが公開されていて気持の良いものではない。爪で刻んだという石の落書など見ていると、どこからか呪いの叫びが聞こえて来るようで思わずブルッと冷や汗が出る。

ブラディ塔というのが中にあった。

〝血まみれ虐殺の塔〟とでも訳すのか、例のリチャード3世が幼いエドワード3世とヨーク公を殺させた有名な場所。

さて、虐殺が行われたその部屋を見物していた時のことだ。もしもし、と私の肩をたたく者がある。振り返ると、顔色の悪い貧相な青年が胸の辺にこうもり傘を大事そうにかかえて暗闇の中にボウッと立っている。そして、

「あなた、日本人でしょ？」

「ええ」

「あっ良かった。すみませんが、胃薬持ってたら少しわけてくれませんか…」

初対面とはいえ異邦で出逢った日本人同志である。10分後には、私達はロンドン塔ワキにあるキャフェの椅子に仲良く坐っていた。

持参の胃薬を半分わけ与えると彼は大そう喜び、自分の話を始めた。それによると彼は私と同じ33歳。ロンドンに来て二ヵ月目だという。昨日、ロンドン塔を見物に来て置き忘れたこうもり傘を今日取りに来たら持病の胃痛が出、困っている時に私を見つけたということらしい。職業は高校の教師。帰国したら小説を書いてみたいとも言う。

突然、ティーカップを置いて彼が叫んだ。

「しまった。又、忘れ物だ！」

「今度は一体何ですか？」

「クツです」

「えっ、まさか?!」

すぐに戻ります。と言い捨てて彼はロンドン塔の方へ駈けて行ったのだが、その時の情景を話してもあなたは信じてくれないだろう。私自身が一瞬わが目を疑ったのだから。どういうことかと言うと、走って行く彼のズボンの下に足が丸で見えないのだ。地上30センチあたりの空中をフワフワと浮遊して小さくなり、やがて門の奥にスッと消えてしまったのだ。

それきり彼は戻って来なかった。

☆　☆

話はこれだけである。

私の手元に一本の黒いこうもり傘が残った。彼は二重に忘れ物をしたことになる。

傘を広げてみるとネームの刺しゅうがあり、どうやらKINNOSUKEと読める。

彼が、時空を超えて現われた80年前の夏目金之助である。

などと言うつもりは毛頭ない。

ただ、晩年の漱石が忘れ物のひどい人物だったことを私達はよく知っている。

彼と出逢ったあの日のことを思い出すたびに後悔することが一つだけある。

…半分と言わず胃薬全部くれてやればよかった…。

今ではどうすることもできないが。